

大島如雲

《鑄銅大膽瓶》



大島如雲 (1858-1940)
《鑄銅大膽瓶》

1907年
青銅、鑄造
高さ40.6、最大径41.0cm
平成28年度寄贈
撮影：齋城卓

一

抱えもある壺の中を鯉が泳いでいます。左へ頭を向ける大きな鯉、その腹のあたりにもう一匹、さらに右手には今にもこちらへ向かってきそうな鯉の顔。上からも見てみましょう。壺の肩にもちよど側面の鯉と向き合うようにして、口を開けた鯉がいます。図版左肩の小さく突き出た部分は水面からわずかにのぞく口で、顔以外は水の下に隠れています。波打つ壺の口は流水を表し、その流れに乗って水面に浮かぶ花が一つ。細い金で象嵌された鯉の目は鋭く花を捉え、一瞬の緊張感を伝えています。

さて、冒頭に「壺の中」と書きましたが、実際は数センチの厚みを持った金属があるだけで、中身はもちろん空っぽ。黒味がかつた艶のある鑄肌とおぼろげに溶けあいながら、曲面上に鯉の姿がきわめて写實的に鑄造されています。遠くの物ほど輪郭をぼんやり表すことで、わずかな凹凸でも広い奥行きを感じられるのです。

大島如雲は江戸の小石川生まれ、鑄金業を営む父のもとで修業し、一八七七年に家業を継ぎました。当時、万国博覧会をきっかけに、日本の工芸品は西欧諸国で爆発的な人気を集めていました。輸出工芸品の製作に携わっていた如雲は、複雑な形を繊細に表現できる蠟型鑄造を得意とし、その卓越した技量で国内外の博覧会で受賞を重ねました。一八九〇年、

開校直後の東京美術学校に迎えられて蠟型鑄造を指導し、一九一八年から三二年まで教授を務めました。作品はあまり多くは知られていません。

本作《鑄銅大膽瓶》は東京勸業博覧会の出品作と考えられ、鯉を好んで題材にした如雲の作品の中でもとりわけ優品です。私たちの眼は、見えない水が広がる別世界を壺の中に見出し、悠然と泳ぎまわる鯉の位置関係までも無意識に知覚します。大きく膨らんだ肩や立体的な口の作りが空間の矛盾を巧みに覆い隠し、抑制された表現のなかにイリュージョンが生み出されています。景德鎮窯の青花磁器を思わせる雰囲気などは、中国陶磁に範をとったことをうかがわせますが、特徴的な口部のうねりや時代背景からは、アール・ヌーヴの影も考えられます。

ですが、如雲の関心はただまっすぐと鯉に向けられていたようです。置物であれ器物であれ、時に明治時代の工芸は、各々の材質と技法を駆使して、本物をつくりに作ることが求められました。そして、如雲は対象だけでなく、むしろ空間としての実在感を器物の表面に描き出すことに意を注ぎました。鑄金の特質を生かした「立体による立体感／奥行き感」の追求こそが如雲の表現であり、その答えは鯉が泳ぐ水の中にあつたのかもしれない。

(工芸課研究員 中尾優衣)